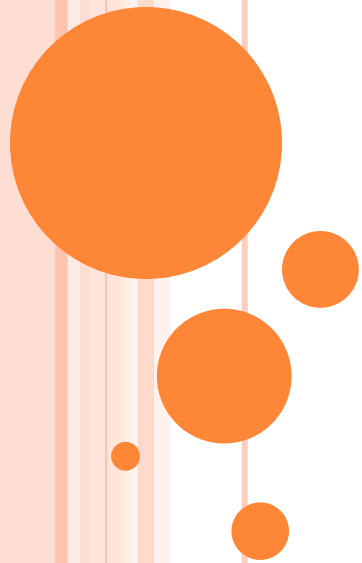


日本語教育実践を研究し共有することの意味

金沢大学 人間社会研究域国際学系
市嶋典子



日本語教育学における実践と理論の関係

- 学会誌『日本語教育』1号～135号（計1510本）
の内容分析（市嶋2009、2014）



実践と関わりのある論文 120本（全体の約8%）

「構文，文法，文の分析」，「第二言語習得」，「形態，語彙，意味」，「社会言語学，語用論」等を，**具体的な日本語教育実践と切り離れた文脈で研究**しているものが多い。

- 「理論の実践化」「実践の典型化」「実践の中の理論」
佐藤(1998)



理論の実践化・実践の典型化・実践の中の理論 (佐藤1998)

①理論の実践化

科学的な原理や普遍的な技術の証明の場として実践を捉えようとする立場であり、仮説検証型、実験型の研究に代表される。



この立場は、実践に内在する**多様性**，教師と学習者，学習者間に生起する**相互性**といった不確定要素を無化している点で問題



理論の実践化・実践の典型化・実践の中の理論 (佐藤1998)

②「実践の典型化」

優れた実践の技法を一人の名人芸ではなく誰もが共有しうる技術として、一般化し、授業を改革する運動へと導く立場



そのほとんどがある特定の規準や教授方法を前提としており、最終的には「理論の実践化」へと結びついていくという問題をはらんでいる。このような「すぐれた授業の典型化」は、先端部分の実践を焦点として特定の基準のもとに**教育技術を一般化**する傾向があり、**教師の仕事を一化**してしまふ。



理論の実践化・実践の典型化・実践の中の理論(佐藤1998)

③「実践の中の理論」

教師の「実践的知識」に注目し、それを探求する立場。理論と実践とは別々の領域ではなく、全ての実践が理論的実践として対象化されるもの。ここで述べられている理論は、従来の学問的理論とは異なった概念であり、「活動に内在して機能している理論であり、実践の内側で機能している理論」である。



教師が実践場面で生成し機能させている洞察や省察や判断の力を**「実践的見識」**として高めることを追及するもの



日本語教育学における実践研究の質的变化

1966-1979年 実践内容を報告する機能

- 言語理論と言語教育は無関係ではないが、それ程、密接な関係もない。(牧野1975)
- 日頃の教育実践を他の教師に具体的に伝えるもの、すぐに役立つ教え方の情報が得られるもの(佐藤1998)

1980-1989年 「実践の典型化」

- TPR, サイレント・ウェイ, コミュニカティブ・アプローチといった既存のアプローチ, 教授法を前提としており, その効果を検証している。



日本語教育学における実践研究の質的変化

1990-1999年「理論の実践化」

- 既存の理論を量的分析によって検証し、その精緻化を目的とする実験型、仮説検証型の研究

2000年以降「実践の中の理論」への注目

- 「実践に持ち込まれて利用される」理論ではなく「実践者が実践の中で練り上げてきた」理論の重要性(石黒2004)



日本語教育学における実践研究の質的変化

- 横溝(2001)

「**教師としての『私』**が登場し、授業に参加する「**一人ひとりの経験の叙述**」を通じた、教室の出来事の意味の多義的な意味の解読」(佐藤1997)の追求

- 細川(2005)

「**教師自身が自分の実践を内省的に振り返りつつ**, その意味を確認し, 他者とのインターアクションを積極的に受け入れ, より高次の**自己実現**を目指そうとする活動」

- 文野(2010)

教師の成長には「**自己主導性**」が必要であり, 自己主導性の獲得には, **教師自身が自分の授業を批判的に内省**する授業分析が必要



日本語教育学における実践研究の質的变化

- 学習者の多様化(中国帰国者、難民、生活者としての外国人、年少者、看護師・介護福祉士)を背景に研究の対象/関心が言語から学習者、社会へと拡大
- 「言語」に関する研究が多いが、2000年代には、「心理」や「社会」分野をキーワードとする研究が増加(学会誌委員会編集担当委員,2012)
- 教師一人一人の**教育観**への注目



日本語教育学における実践研究の課題

- 実践研究は「**how to**」が中心になる傾向(齋藤2005)
- 日本語教育学が日本語学や言語学の植民地になっている→**日本語教育学のためのコミュニケーション研究**が必要(野田, 2012)
- 基礎—応用の枠組みを見直し「**フィールドの学**としての日本語教育実践研究」を目指すべき(石黒, 2004)



ポストメソッド

- メソッドそのものの代わりとなる方法を探すことへの注目
- ポストメソッドの教育原理(クマラヴァディヴェル2022)

①場の特殊性

②実践性

③可能性



ポストメソッド

○ 場の特殊性

言語教育の実践は、特定の文脈の中で営まれており、従来のメソッド概念のようにどこでも誰にでも使えるものはない。それよりも、現場の人達の実体験を重視する必要がある。

○ 実践性

理論を生み出す研究者と理論を消費する実践者という不健全な関係性を否定し、現場の教師が日々の実践から理論を生み出していく必要がある。

○ 可能性

教師も学習者も自身が属している社会文化的文脈を自らよりよく変えていくことができる可能性がある。



実践を共有することの意味

- 場の特殊性、実践性、可能性の共有
- 実践から得られた知が、他の人々が経験したできごとに通じるものがある、各々がそのことを実感できたとき、その実践知に普遍性が見出されたと言えるのではないか。
- 「人間の生の充実とそれを支えるための言葉の創造という日本語教育学的な知」(市嶋2014)の共有



参考文献

- 石黒広昭(2004)「フィールド学としての日本語教育実践研究」『日本語教育』120, 1-12.
- 市嶋典子(2009)「日本語教育における「実践研究」論文の質的变化 —学会誌『日本語教育』をてがかりに」『日本語教育論集』25, 3-17, 国立国語研究所
<https://core.ac.uk/download/pdf/234726768.pdf>
- 市嶋典子(2014)『日本語教育における評価と実践研究 —対話的アセスメント: 価値の衝突と共有のプロセス』 ココ出版.
- 学会誌委員会編集担当委員(2012)「学会誌50年の記録」『日本語教育』153, 71-80.
- 齋藤ひろみ(2005)「子どもたちのことばを育む」授業づくり—教師と研究者による実践研究の取り組み」『日本語教育』126, 35-44.
- 佐藤学(1998)「教師の実践的思考の中の心理学」佐伯胖・宮崎清隆・佐藤学・石黒広昭著『心理学と教育実践の間で』9-56, 東京大学出版会.
- 文野峯子(2010)「教師の成長と授業分析」『日本語教育』144, 15-24.
- 細川英雄(2005)「実践研究とは何か—私はどのような教室をめざすのかという問い」『日本語教育』126, 4-14
- 牧野成一(1975)「言語理論と日本語教育の関係」『日本語教育』26, 1-4.
- 横溝紳一郎(2001)「授業の実践報告のあるべき姿とは?」『日本語教育』111, 56-65.
- Kumaravadivelu, B. (2012) Language teacher education for a global society: A modular model for knowing, analyzing, recognizing, doing, and seeing. Routledge.
和訳: 南浦ほか(2022)『言語教師教育論: 境界なき時代の「知る・分析する・認識する・為す・見る」教師』春風社.